



国際児童年 1979

親と子

「父や母が、ぼくを本当に大事に思っていてくれるんだなあ、と強く感じたあの時のこと」

永生第二小六年

岩瀬 長治

ぼくは去年の九月ごろ、左足のひざを打って痛めてしまった。ちょっととした打ばくのせいだと思っていたが、父も母も心配して、病院へつれていってくれた。

病院の先生は、比べるためにとった両足のレントゲン写真をみて、「左足の打ばくは大したことはありません。でも、右足のひざにくぼみみたいなものができていますね。むしろそれの方が気がかりです。ひどいかどうかわかりませんが」と言った。それからの検査で、くぼみの所には脂肪がたまっていて、手術をしてとりのぞいた方がよいことがわかった。病院の先生が、「ひどい時には、足を切らなけ



ればなりませんね」と言った。ぼくは、もしかしたら足を切られるんじゃないかと思ひ、涙が出てきそうになった。「心配しなくていいよ。大した手術ではないさうだからね。」手術は、受けてみれば大したことはないものだ。父と母にはげまされて、心が少し楽になったが、父と母が、入院や手術の手続きについて話しているのを見ると、神経質になっているぼくは、これからどうなるのかと不安にもなるのだ。

入院の前日、長治に不自由させないように、身の周りの物を全部持っていくてやれよ」と、父が言ってくれた。そして、母といっしょにせつせと荷づくりをしてくれた。

病室は、一人部屋だった。窓からは紅葉した山々が見え美しかった。(この窓から、冬景色に変わった山々を一月近くもながめてすごすことになるうとは、この時には、両親もぼくも夢にも思わなかった。)

「手術の日は食べ物は食べないで下さい。水は九時までです」看護婦さんに言われて食いしんぼうのぼくはとても困った。しかし、母が、「明日は手術だから、今夜のうちになくさん食べて、栄養をつけなければね。」と言って、色々食べ物を用意してくれた。とてもうれしかった。その日の夜は、緊張して眠れなかった。痛くてもきつとがんばるぞと、父と母の顔を思いうかべ心にちかかった。

手術の終わつたあくる朝、目がさめると体がだるかった。父と母が、まくら元にいた。よくがんばつたな。」と父がほめてくれた。目をさまして安心したのか、父は会社へ行った。それからは、母が付ききりではく世話をしてくれたり、足が使えないので、おしっこをしたり、物を取ったりを、すべて母がめんどうみてくれた。父もいそがしい会社の時間をぬって一日一回は顔をみせて、「だいじようぶかがんばれよ。」と言ってすぐにもどつていった。やと許しが出て固い物が食べられるようになった時母は、ぼくの大好きななめこの味そ汁や、うどんなどを作ってくれた。あの時のおいしかった味は忘れられない。

看病のつかれがでたのか、母はしきりに肩が痛いような身ぶりになったり、だるがたりするようになった。この頃から父が代つて病院へとまることが多くなつた。ぼくは、なるべくわがままをいわないようにした。とうとう、松葉づえで歩けるようになった。母は「本当によかつたね。」と喜んでくれた。初めのうちは、自分の体が重くてうまく歩けなかった。「いやだよもう。」とふくれたりしたが、母にはげまされて、毎日少しずつ練習して慣れしてきた。

いよいよ退院の日が来た。病室

予防接種

○ツベルクリン (BCG)

対象児 昭和51年11月～52年1月生れと 52年10月生れ

期日 9月25日(火)ツベルクリン 9月27日(木)ツベルクリン

反応検査・BCG

対象児 昭和52年11月～53年2月生れ

期日 10月2日(火)ツベルクリン 10月4日(木)ツベルクリン

反応検査・BCG

対象児 昭和53年3月～6月生れ

期日 10月9日(火)ツベルクリン 10月11日(木)ツベルクリン

反応検査・BCG

○2種 (ジ・破) 混合第2期

期日 9月26日(水)

○3種 (ジ・破・百) 混合第1期

が四階だったので一階から自動車までの道は、父がおぶつてくれた。「長治、重くなったな。」父の大きな手がぼくのしりをしっかり支えてくれた。こうして、長かった病院の生活は終わった。両親のおかげで、ぼくは今こうして普通の人のように歩いたり走ったりすることが出来る。この入院生活を、ぼくは、一生忘れないだろう。



○第1回目

対象児 昭和52年2月～4月生れ

期日 10月16日(火)

(2種混合がおくれている人は10月16日の2時30分～40分の間実施します。)

会場 文化会館 健康相談室

時間 午後1時30分～2時30分

※2種・3種混合の個人通知はしてありません。

第1期完了後、12ヶ月～18ヶ月の間に1回だけ、第1期の会場で忘れずに受けてください。